

主張

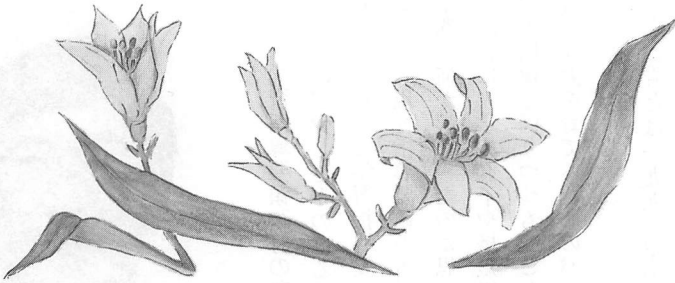
避難訓練より

川上啓一郎

六月二十八日、本校で避難訓練を実施しました。六九年前の昭和二十三年六月二十八日に発生した福井大震災は、当時としては最悪の約三、七〇〇人の死者を出す甚大なもので、その教訓を風化させないために毎年行っている行事です。訓練は、地震が発生し、次に校内で火災が発生したという想定で行いました。全校生徒四三二人が、避難指示から避難を完了するまでの時間は四分一〇秒でした。生徒たちは教室からグラウンドまでの避難ルートをハンカチを口に当て、一言もしゃべらず真剣な態度で移動していました。訓練後、担当者が一生懸命取り組んでいた様子を褒めると同時に、速やかに避難できたことについて次のような講評をしました。

「君たちは、集会等で体育館に集まるとき、教室前の廊下に並びおしゃべりせず、列を崩さずに体育館に出ているね。また、校内放送が流れる際には、話を中断しその放送をしっかり聴いています。このように、普段の生活の中で実行していることが今回の避難訓練にも生かされていると思います。もし、実際にこのような災害に遭遇しても、きっと君たちは冷静に行動し、全員が無事に怪我もなく避難できると信じています。」

さて、平成二十九年三月三十一日に新学習指導要領が告示されました。今回の改定では、



知識・情報・技術の習得だけでなく、急激な変化に対応したり、先を見通してそれらを活用して新たなものを創り出す資質・能力・意欲を培うことの重要性が強調されています。そして、次代を担う生徒の知識の理解の質を高めるために、各教科、道徳、総合的な学習の時間および特別活動など学校教育全体を通して確かな学力を育成することが再確認されました。「何を」「どのように学び」「何ができるようにするか」といった、知識の理解の質を高め、資質・能力を育むことが一層強く求められています。

今回の避難訓練では「放送は静かに聴く（情報を正確に受け止め、正しい判断をする）」「整列をして体育館に出る（整然と冷静に行動をする）」という基礎学習が「全員無事の速やかな避難（命を守る）」につながることを生徒たちは学び、「整列をして体育館に出る」「放送は静かに聴く」を新たな意味で捉え直したのではないかと思います。

担当した教員の働きかけが、生徒たちの見方や考え方の広がりを生み出したように、私には見えました。あたかも、点（知識）と点（知識）が結び付き、線（新たな知識）となり、その線が束になり面や立体（新たな考えや可能性）となっていくように、生徒たちの頭の中で新たな知識の創造、あるいは、より質の高い理解へと思考していったように捉えられました。現在のところ、「主体的・対話的で深い学び」をキーワードとする新指導要領が目指す授業改善について、現場の教職員は試行錯誤している状況です。しかし、これまで積み重ねてきた授業改善の研究の先にあることは確かであり、教職員自らが協働で主体的・対話的な深い学びを展開し、研究の歩みを進めていくことが重要です。我々校長は、こうした教育改革の風土を確実に自校に根付かせることが使命ではないかと、改めて、確信しています。

（全日中副会長・福井市光陽中学校長）